

学び合い教え合う学園へ

# 平成25年度 FD・SD活動報告書

郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部



平成26年5月

学園教育充実研究会

## 目次

1. 授業公開 .....	4
1-1 授業公開（対象指定型）・授業検討会 .....	4
1-2 全授業公開期間.....	6
2. 学園教育充実研究会（大会） .....	7
2-1.教職員合同研修ーワールドカフェ in KGCー.....	8
ハーベスト抜粋.....	9
参加者の感想（抜粋） .....	10
2-2 FD 講演会.....	11
学生による能動的学修を目指した大学授業の転換 .....	11
2-3 シンポジウムー学修成果を上げる授業とは.....	12
2-3-1 学修成果を上げる講義とは.....	12
2-3-1 学修成果を上げる実験・実習とは.....	13
2-3-1 学修成果を上げる実技・演習とは.....	15
2-4 SD 研修ーPDCA サイクル中間発表会 .....	17
3. 各種講演会・ワークショップ.....	18
3-1 情報セキュリティ講習会ー「情報に対する危機管理」 .....	18
3-2 ビジネスマナー研修会.....	19
3-3 障がい学生支援 研修会ー発達障がいを中心としてー .....	20
4. SDー外部研修参加記録.....	21
4-1 教務部.....	21
4-2 学生生活部.....	22
4-3 就職部.....	22
4-4 大学図書館.....	23
4-5 保健室 .....	23
4-6 家庭寮 .....	23
4-7 入学事務部.....	24
4-8 広報室.....	24
4-9 総務部.....	24
4-10 管財部.....	24
4-11 経理部 .....	25
5. 調査・研究 .....	26
5-1 授業評価アンケート .....	26
5-2 学生の授業・学習状況に関する実態調査.....	27

## 大学改革に思う

SD・FDを含めて昨今の日本語表現にはカタカナ語でなければ満足できないのかと思えるほどで、GPSとかGPAとか略語が多くみられ区別が付きにくいのは私だけなのだろうか。

私の立場からは、カタカナ英語やカタカナ表現を含め頭文字略語を一概に否定はできないで甘受しているが、大学改革とか教育改革の名のもとで、カタカナ語が大手を振ってまかり通るのには些かの反発を覚える。

間もなく実施される大学ポートレートの調査票に目を通しながら、アクティブラーニング、サービスラーニング、ポートフォリオ、TA・RA・SA・メンター、アセスメントポリシー、ルーブリック等々に漢字が添付されるから始末が悪いとの思いを強くする。

大学ポートレートの調査項目を総合的に考えると大学評価機関の評価基準の解釈と同様な内容が多く、労多くして何とやらではないかと考える。

近頃と云っても、十数年は経過しているようが、キャリア教育と云う言葉が使われだしている。この言葉は主に大学教育に於いて使われているようであると感じるのは私のみではないであろう。私にはキャリア教育が二通りに使われているように思えてならない。一つには就職支援を目的としたプログラムであり、もう一つには自己の専門性を多様にし、豊かな人間性を養成することにあるように思う。私の知るキャリア教育は家庭で自分の人生について考えることから始まり、成長とともに学校教育との連携により自己の将来構想や多様な能力を涵養する自助努力へといざなう過程をテーマにしているのではと考える。

FDやSDとして諸々の研修や他者評価が要求されているが、本来の趣旨とは些か違いがあるのではないか。一人の人間が自己の職業を達成するための手段として自己責任で能力向上を図ることは当然である。

私たちは学生・生徒の成長を支援することを職業としている限り、学生・生徒のために役立つ多様で高度な能力を自助努力で涵養してはじめて職業人と云えよう。これが、FD・SDの基本であり、自助努力では不可能な能力の涵養こそが研修として推奨されるべきものではなかろうか。

終わりに、学園教育充実の研修にあたり、新たな工夫を加えた自己覚醒の機会を整え、様々な要因を整理された委員の皆さんの労苦に感謝の言葉を記します。御苦労さまでした。

平成26年5月12日 学園長 関口 修

## 本年度の FD・SD 活動を振り返って

学園教育充実研究会 主任  
垣花真一郎

学園教育充実研究会は昭和 44 年に設立された長い歴史をもつ委員会である。長らく「学園教育充実研究会」という夏の研修大会を中心に本学の研修活動の中心を担ってきた。平成 24 年度からは、新たに、本学の FD・SD のテーマを「学び合い、教え合う学園へ」と定め、新たな視点で種々の研修活動を企画している。これは本学の教職員が本来的にもつ相互扶助の精神を基盤にしながら、より主体的な研修活動を目指そうというものである。今年度は、この体制となって 2 年目であった。以下に「授業の改善」、「大会・研修会の充実」、「調査・研究活動の充実」という 3 つの目標に沿って、今年度の活動について振り返る。

「授業の改善」に関しては、第一に、授業評価アンケートの活用方法の改善が課題であり、この点については、年度当初に「各学科主任への所属教員の結果一覧配布」及び「学科主任による学科教員と面談」という施策を実現できた。また、第二に、後期に「全授業公開・相互参観」という取り組みを実現出来た。事後の教職員を対象にしたアンケートの結果から、実施方法等において改善を要する点が見受けられたものの、教職員から肯定的評価を得たといえる。

「大会・研修会の充実」については、第一に、夏の大会の改善を実施した。特に、本年度は全教職員が同じ立場でグループ討議する「ワールドカフェ」という新企画を実施し、好評を得た。第二に、学期期間の FD・SD 企画の開催である。前年度は 2 つの研修会を実施したが、今年度は新たに本研究会に SD 部門が新設されたこともあり、研修会の実施回数、内容の拡充が大きな課題であった。結果として、「情報セキュリティ講習会」「ビジネスマナー研修会」「障がい学生支援研修会—発達障がいを中心として」という 3 つの研修会を実施し、いずれも好評を得た。

「調査・研究活動の充実」は、本年度の新しい課題であった。11 月に大学短大全学生を対象に「授業・学修状況についての実態調査」を実施し、報告書を学内公開した。これまで見えなかった学生の実態を明らかにした点で、この取り組みは評価できる。

# 1. 授業公開

## 1-1 授業公開（対象指定型）・授業検討会

本学では教員の授業実践力の向上を目的に、学園教育充実研究会発足以来、対象学科を1学科ないし2学科選定し、授業公開を行っている。平成24年度からは授業公開直後に、参観者を交えた授業検討会を実施している。本年度は大学食物栄養学科が対象学科となり、菊池節子准教授が授業公開の担当者となった。

### I. 実施概要

- 授業担当者 菊池節子 准教授
- 科目名 調理学
- 開講期 平成25年度前期
- 公開日時 平成25年7月22日（月）Ⅲ時限
- 教室 641 教室
- 対象学生 大学食物栄養学科1年 59名



## II. 公開授業の概要

1. 公開された授業(本時のねらい)	ゲル化素材であるゼラチン、寒天、カラギーナン、ペクチンを取り上げ、ゲル化剤により異なる調理性、添加材料の影響などについて理解し、日常の調理に応用することのできる実践力を養う。
2. 授業内容	<p>あいさつ・出席確認 (約 5 分)</p> <p>【導入】 前回の振り返り：確認テストの簡単な解説の質問事項への回答 (約 15 分)</p> <p>【展開】 ①寒天についてのビデオ鑑賞 (約 20 分)</p> <p>②ゲル化用食品素材の調理性について (約 40 分)</p> <p>【まとめ】 本時の学習範囲に確認テスト (管理栄養士国家試験過去問より) 答え合わせ、用紙回収 (質問事項記載後)、次週予告 (約 10 分)</p>
3. 工夫した点 (参観のポイント)	<p>①実物回覧…ゲル化剤に興味を持ってもらうため、棒寒天、糸寒天、粉寒天、板ゼラチン、粉ゼラチンの実物を回覧し、学生が五感で味わう機会を設けた。</p> <p>②動画鑑賞…寒天の原料、製造方法、食文化についての理解を深めるため、「信州の寒天づくり」の動画を鑑賞した。</p> <p>③現場で役立つ調理科学…知識のみで終わらず実践力につなげるため、同じゲル化剤でも寒天とゼラチンでは調理特性が大きく異なることを理解させた上で、大量調理現場では、設備、調理時間、作業人数、喫食対象者、食数、喫食時間などを十分考慮してゲル化剤を選択する必要があることを考えさせた。</p> <p>④管理栄養士国家試験対策…確認テストとして毎回国家試験過去問を準備している。次週、前回の簡単な解説と学生質問への返答をして、不足分を補ったり、知識のより一層の定着を図っている。</p>
4. 授業の自評	<p>①季節的に旬のデザートであるゼリーを取り上げ、学生にゼラチンゼリーや寒天ゼリーを実際に作ることをイメージしてもらい、調理方法を学生に質問しながらの、学生参加型の授業を実施したかったが、積極的な学生の反応が少なかった。</p> <p>②視聴覚教材として用いたビデオの内容が、製造工程や食文化に片寄っていたため、後半飽きてしまった学生が見られた。できれば、調理特性についても触れて時間を短縮するなど、自分なりに編集できればよかった。</p> <p>③空欄を埋めることによりポイントが確認できるプリントを準備するなど、学生が教師の説明を聞き逃すことなく、落ち着いて授業に臨めるような工夫が必要であった。</p>
5. 公開授業に対する感想	<p>公開授業は自己の振り返りのよいチャンスであり、大変有効と考える。</p> <p>お忙しい中参観いただいた先生方に、心より感謝いたします。</p> <p>どうもありがとうございました。</p>

## 1-2 全授業公開期間

本学では従来から教員の授業力向上を目的に、毎年、全学で1～2名の教員の授業公開・参観を行ってきた。この取り組みをさらに推し進めるために、平成25年度に「全授業公開・参観期間」を導入した。この期間には、各教員は自身の授業を公開すると共に、他の授業を1度以上、参観する義務を負う。また、職員も授業の参観を求められる点もこの取り組みの大きな特徴である。初めての取り組み故に、教員の間にも様々な意見が見られたが、多くの教員が自らの授業の在り方を振り返るきっかけになったと評価している。学園教育充実研究会では、寄せられた改善要望を踏まえつつ、この取り組みを継続していきたい。

### ■ 公開時期

11月4～5週の2週間。一般的には第9回、10回の授業。

### ■ 実施要項

- ① 専任教員は「公開免除の規定」により免除されない限り、全ての自身の授業を公開する。
- ② 期間中、最低限1回は他教員の授業を参観する。参観時には参観者名簿に記帳し、授業担当者に感想用紙の提出を行う。
- ③ 公開期間終了後に、授業公開者は自身の授業の参観者名簿を学園教育充実研究会に提出する。  
※事務局職員は、業務に支障がない限り、期間中1度は授業参観を行う。参観者名簿の記帳、感想用紙の記入・提出等は教員と同様とする。



## 2. 学園教育充実研究会（大会）

学園教育充実研究会（大会）は、昭和 44 年（1969 年）より、学園の教育の充実を図ることを目的として実施されている教員・職員の研修大会である。なお、本委員会の名前も、この大会の名前に由来している。平成 25 年度は、前年度に引き続き「学び合い、教え合う学園へ」をテーマに掲げ、教職員が主体的に、自らの研鑽をつめるような多様な企画を行った。

### ■ 実施日程

平成 25 年 9 月 13 日（金）8:50～16:40



表 2-1 平成 25 年度 学園教育充実研究会（夏の大会）プログラム

種別	時間	事項
開会式	8:50～9:00	学園長開会の辞・学園教育充実研究会趣旨説明
FD, SD	9:00～11:50	ワールドカフェ in KGC
FD	13:00～14:20	外部講師による講演
FD	14:30～15:50	授業検討シンポジウム
SD	13:00～15:50	平成 25 年度各部署 PDCA サイクル中間発表会
閉会式	16:10～16:40	各部会報告・学園長閉会の辞



## 2-1.教職員合同研修—ワールドカフェ in KGC—

ファシリテーター 京免 徹雄（幼児教育学科・充実研）

サブファシリテーター 菅野 英樹（入学事務部・充実研） 高橋 一（経理部・充実研）

「ワールド・カフェ」とは、対話する相手を変えながら、少人数での対話を積み重ね、全員でテーマを彫り上げていく「大規模型ダイアログ」である。話しやすい少人数でのダイアログからはじまり、メンバーを替えて対話することにより、アイデアをつなぎ合わせていく。職種や職位などの垣根を越えて対話を行うという点も特徴である。今回は「本学園の魅力と何か」をテーマに、対話を行った。



## ハーベスト抜粋

ハーベストとは、ワールドカフェの最後に、テーマについて一人一言ずつの言葉を付箋紙に書くものである。今回のテーマ「本学園の魅力と何か」のハーベストを紹介する。

・面倒見の良さ	・伝統のある女子大で保護者が安心できる
・地域で活躍する卒業生	・小規模でそれなりのまとまりのあること
・家族的な教育	・親切
・附属高校がある	・設備、環境の魅力
・地域との連携	・アドバイザー制を中心とした学生の指導
・専門職志向	・富左先生が築き上げた地方の名門女子大学
・地元志向	・感性の教育
・地域密着、地域貢献	・女子学生としての思いやり、素直さ
・生涯学習	・教職員の指導
・小規模大学ならではの温かいところ	・富左先生が作り上げた学園の原点回帰
・地域に開かれた学園をアピールすること。	・女子教育の充実
・「愛と思いやりのある教育」の伝統	・あいさつ
・制服	・学生のことを良く把握している(←アドバイザー制)
・安心 安全 親切	・家庭的、家族的
・全体的にアットホーム	・芸術鑑賞講座
・個別教育が行き届いている	・歴史ある大学
・卒業生の活躍	・自然に囲まれた郡山の中心にある
・安心(学生指導)	・女性ならではの教育ができる
・伝統ある女子大としてきめ細やかな教育	・アドバイザー制で先生方のきめ細やかな学生指導
・芸術鑑賞講座、教養講座などの感性の教育	・関口富左前学長の教育のすばらしさ
・個別的な教育と伝統	・内部の掃除も行き届いている
・地域に根ざした教育と伝統	・「守られている」という安心感がある(守衛その他)
・アドバイザー制度(面倒見が良い、少人数教育)	・教職員が親切なこと、あたたかい学校だと思う
・立地条件が良い(交通面、緑が多い)	・アドバイザー制度
・対面式建学記念講堂が素晴らしい	・家族的である
・各学科特性を生かした地域発信	・学生がやさしい(素直)
・教養講座、芸術鑑賞講座	・美しいキャンパス
・家族的、一人ひとりを大切にされた教育(同窓会)	・母の愛
・女性の特性の可能性	・美しい環境
・女子大であること	・地域女子大ならではの魅力
・きめ細やかな学生指導	・女子の教職員が多いこと
・親密さに満ちている	・卒業生の活躍
・本質的なところに「人間を大切にする」という姿勢	・芸術鑑賞講座(広報活動への期待)

## 参加者の感想（抜粋）

- ・私学人として教育、研究、経営のバランスが大切であることを改めて実感した。
- ・各グループの模造紙を見るとそれぞれ違ってとても楽しかった。
- ・いろいろな部署・学科の先生方とお話しができてとても楽しく、勉強になった。学園の魅力を改めて気づくことができた。
- ・多くの同僚と話せて良かった。課題意識は共有しているが、あとは実行力。
- ・最初はとても緊張したが、先生方のお話を聞くことができる良い機会となり、大変勉強になった。このような機会が年に1~2回あっても良いと思った。
- ・もっと教職員同志が連携を取り合い、コミュニケーションをとりながら大学を良くしていけたらよいと思う。
- ・教員の先生方の負担が多い中では、自由な発想や研究は難しいと実感。ある程度学生主体にさせなければと思う。
- ・有意義な時間であった。他の学科・部署の方々と楽しく話し合えた。本学における不易流行、温故知新についてその重要性を話し合えた。
- ・フリーの話が出来て大変良かった。今回の企画が素晴らしい。
- ・“良い所”を探すと必ず光と影のように“改善すべき点”も出てくる。光と影の両方で良い意見が出たと思う。
- ・他学科、他部署の方々と距離が近くなった気がする。多くの皆様と触れ合うことが出来、楽しい時間でした。あっという間に過ぎてしまった。またこの続きが楽しみ。
- ・企画としておもしろいが、6人で20分程度の区切りでは時間不足となりがちである。
- ・先生方、職員の皆さんの「あつい」パワーを感じた。開成学園 LOVE♡
- ・次回は附属高校・幼稚園の教職員も参加した形で実施していただきたい。
- ・本学の長所、短所が見えてきた。学科・所属を越えて話し合いが出来る場は今後も必要。
- ・ワールドカフェというやり方が初めてだったがグループを移動するという発想がおもしろいと感じた。
- ・短時間で目まぐるしくもあったが、普段会話をすることの少ない教職員の意見が聞けたことは貴重であった。時間設定を工夫してコーヒブレイクがあったら良かった。
- ・学園内でも全く言葉を交わしたことの無い部署の方々と親しく話が出来て良かった。
- ・話し合うことによって教職員が本学を、学生を大切に思っていることを強く感じた。この気持ちを大事に働いていこうと思った。
- ・リラックスして臨めた。ちょっと外れると愚痴になるのが怖い。
- ・意見交換が否定からスタートしない部分が発信しやすく良いところだと思う。
- ・要項を読んだ時は気が重くなったが、関わる機会の無い方と話してみて共感したり多様な意見が知れて良い勉強になった。
- ・改めて学園の魅力に気付くことが出来た。沢山の方々とお話しする機会を作ってもらい良かった。愛校心を持って、働きたいと思う。
- ・教職員一同で、皆さん何を思って勤めているのか…“これからの郡山女子大学”わかり、共にがんばろう。

## 2-2 FD 講演会

### 学生による能動的学修を目指した大学授業の転換

演者：帝京大学高等教育開発センター 准教授 井上 史子 先生

司会：京免 徹雄（短大 幼児教育学科 講師）

#### 【要約】

中教審答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』（2012年8月）において、グローバル化や少子高齢化、情報化といった急激に変化する現代社会を生きる学生にとって、「生涯学び続け、どんな環境においても“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力」を育成することが、大学教育の直面する大きな目標であることが示された。そして、そのためには、教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生が相互に刺激を与えながら知的に成長する課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）によって、学生の思考力や表現力を引き出す教育をいかに実現するかが課題である。本講演では、大学教育を取り巻く状況の変化をもとに、各大学におけるFD活動、学生の主体的学びを引き出す授業やその成績評価手法等について紹介する。



#### 司会者まとめ

「われわれが何を教えたかではなく、学生が何を身に付けたかが問われる時代」へ対応するための方策の1つがアクティブ・ラーニングである。演者はその条件として、①能動的学習、②授業目標・授業内容・授業方法・評価方法の一貫性、③教育効果に関する学生と教員の共通理解、④プログラムとしての組織的導入、を挙げていた。本学においてもこれらを達成するために、まずは入口として「シラバス」の改善に着手することが求められるであろう。特に、「評価」の部分に関しては、様々な評価方法の特性、形成的評価の視点、学生へのフィードバックの方法等が充分検討されてこなかった。今後、評価の再考を能動的な学びにつなげる「逆向き設計」を視野に入れつつ、ルーブリックなどの新たな手法の活用が期待される（京免徹雄・学園教育充実研究会）。

### 2-3 シンポジウムー学修成果を上げる授業とは

従来、我が国の高等教育は、教員個人個人の裁量に任される部分が大きく、初等、中等教育に比べて、必ずしも明確な学修成果の保証が求められてこなかった。しかし、近年、高等教育のユニバーサル化、国際競争の激化を背景に、高等教育においても、明確な学修成果が求められるようになってきている。

授業を通して、明確な学修成果を身につけさせるには何が必要か。本シンポジウムでは、科目の種類別に3つの部会を設け、議論を行った。

#### 2-3-1 学修成果を挙げる講義とは

司会 垣花 真一郎（大学人間生活学科 准教授：学園教育充実研究会主任）

山本 裕詞（大学人間生活学科 教授）

板書の活用法を、授業のねらいや他の教具との関係に着目して考察する。具体的には、その諸機能を「確認」、「定着」、「比較」、「課題の共有」、「参加」の五つの観点から整理し、授業時の使用例等を提示しながら説明する。

石田 智宏（大学食物栄養学科 准教授）

PC を利用した授業資料づくりにおいてポイントとしていることは、動的な表現と能動的な参加である。PC の特性を生かした動きのある表現を使ったり、クリックや入力、クイズなどでアクティブに授業に参加してもらうことである。

京免 徹雄（短大幼児教育学科 講師）

本報告では、教職課程「特別活動の研究」における校外活動について紹介する。「遠足・宿泊的行事」の実践力を育成するため、学生が校外活動の指導案を作成、プレゼン後に開成山公園で実施し、相互評価を行っている。





### 司会者まとめ

本シンポジウムでは、講義系科目に対して「板書」「パワーポイント」「グループワーク」という異なるアプローチを取る 3 人の先生方にご登壇いただいた。山本教授からは「黒板は情報の追加・修正が容易であり、学生の意見を反映させながら授業をリアルタイムで構成できるという強みがある」という話があった。石田准教授からは、パワーポイントにおける情報の提示の仕方について、様々な独自のアイデアが提示され、「パワーポイントをただ使うのではなく効果的に使うことの必要性」が示された。京免講師からは、「特別活動の研究」の授業で、学生に遠足の計画を立て、実行させるという事例が紹介され、「途中で教員が介入しすぎず失敗させることも重要」とのお話があった。

いずれの発表も、実際の事例を交えたものであり、すぐに自分の授業に活かしたいと思わせるものであった。どのアプローチを取るにせよ、それぞれの方法の強みを自覚しなければ、本来の効果を発揮しない。今回のシンポジウムは、そのことを改めて実感させられる内容であった（垣花真一郎・学園教育充実研究会）。

### 2-3-1 学修成果を挙げる実験・実習とは

司会： 鍬野 信子（大学 食物栄養学科 准教授）

諸岡 信久（食物栄養学科 教授）

実験・実習教育方法は講義以上に対象学生を理解し易い。先人達が定理を発見した実験方法で、学生が同じ結果を得てその定理を導いた時、発見の興奮がある。理解出来ない時、学生が遭遇した障害を我々と一緒に体験できる。対象学生は教育方法の提供者である。

紺野 信弘（食物栄養学科 教授）

解剖生理学実験では、身体計測、体力、最大酸素摂取量、肺機能測定、エネルギー消費量の算出などを行う。データはエクセルで処理し、表計算ソフトになれさせる。系統講義できなかった、呼吸器や生殖器系などをこの時間で概説する。

## 坂上 茂（短大家政科食物栄養専攻 教授）

管理栄養士課程の専門分野で基礎栄養学の教育内容に関する実習授業である。代謝の理解を目指して実施している24時間尿を用いた生化学的検査によるミネラルのNaとKの栄養アセスメントに関する授業を紹介する。



## 司会者まとめ

非座学の実験・実習の授業には、より実践的な学修とその成果が要求される。しかし、資格課程を構成する授業においては、コアカリキュラムの縛りがあることから、学生が興味を持つような授業内容の展開に至らないことがある。本部会では、コアカリキュラムを充足しつつ、学生に興味・関心を持たせながら効果的に実験・実習に取り組むための工夫について、3人の先生より下記のようにお話を伺った。

諸岡教授より、卒業研究、公衆衛生学実習、食品衛生学実習などの授業について実践報告があった。このことから、実験・実習の教育方法は、講義以上に対象学生を理解し易いこと、先人達が定理を発見した実験方法で同じ結果を得てその定理を導いた時、学生には発見の興奮があること、学生が理解出来ないことに遭遇したとき、教員はその障害と一緒に体験できること、対象学生は教育方法の提供者であ

ることなどが、講義科目との比較から実験・実習授業の効果について示された。

紺野先生より、解剖生理学実験Ⅰの授業について実践報告があった。この授業は、学生自身の身体計測、体力、最大酸素摂取量、肺機能測定、エネルギー消費量の算出などを行うことで、自分自身の身体の特徴を理解することがねらいであること、得られたデータはエクセルで処理し、表計算ソフトになれさせるために、学園貸与のパソコンを有効に活用していることなどを示していただいた。

坂上教授より、基礎栄養学実習の授業について実践報告があった。この授業には、上述した紺野教授の解剖生理学実験Ⅰで実施する身体計測も含まれるが、管理栄養士課程の専門分野で基礎栄養学の教育内容に関する実習授業であるため、ここでは、代謝の理解を目指して実施している24時間尿を用いた生化学的検査によるミネラルのNaとKの栄養アセスメントに関する授業の進め方が示された。

3名の演者については、大学および短大の食物栄養系の学生を対象に教授してきたにも関わらず、これまでは互いの授業内容に触れることがなかったことから、このシンポジウムを通して、相互の授業内容を確認することで、学修成果を上げる工夫や苦勞を共有できたよい機会であったと思われた（鉾野信子・学園教育充実研究会）。

### **2-3-1 学修成果を挙げる実技・演習とは**

司会 松田 理香（短大 生活芸術科 講師）

岡部 富士夫（短大音楽科 教授）

よくみる、よくきく、よくかんがえて、はアンサンブルの基本である。初心者の多い合奏では、基本練習を徹底し、将来に亘って合奏を楽しめる学生を育てたい。また名曲に触れ、体験することも重要である。

浅野 章（短大生活芸術科 教授）

美術作品制作の指導においては、学生の持っている創造的な才能を見つけ潜在的能力を引き出し、それを伸ばす感性の教育を心掛けている。ここでは基礎力（デッサン力）のある学生とそうでない学生の実践指導を紹介する。

鍋山 友子（短大幼児教育学科 講師）

「保育表現技術体育Ⅰ、Ⅱ」を担当し臨機応変に対処できる、しなやかで資質の高い保育者を養成したいと考えている。縄跳び、ダンス、伝承遊び、グループ創作、即興表現等を実施し、運動環境の安全管理を常に意識づけている。





## 司会者まとめ

実技科目である音楽科や生活芸術科の授業では、課題ごとの講評会、合評会などによって、学生たちは常に他と自分を比較し、意識する状況にある。発表会や展示会などを通じて団体行動を学び、周囲と呼吸を合わせながらも個性を失わないことの大切さや難しさを実感する。そのことが教育成果の一つとなっている。

また、演習科目である幼児教育学科の保育表現技術「体育」の授業は、保育者養成という目的が明確にあり、同じく表現技術という区分に位置する音楽や器楽、造形の授業との連携があり、それらを総合的に判断して学修成果とする部分が含まれる。その中で「体育」は、自らの身体を使うことで様々な運動機能やそのための安全管理の重要性を知りながら、保育者としての広い視野で物事を見ることを学ぶ。

評価の数値化が困難とも言われる実技・演習科目であるが、2年間という限られた時間の中で、学生たちが自分の成長を実感できるようにするために、日々の授業で工夫されていることや、感性教育の実践とその成果を証明することの難しさに苦心されていることの報告があった。

教員は、経験や技術の積み重ねに差があるさまざまな学生一人一人に対し、長期的視野に立った展望を与えつつ、一人一人の学修成果を上げるために、これからも努力していかねばならないということを改めて実感した部会であった（松田理香・学園教育充実研究会）。

## 2-4 SD 研修—PDCA サイクル中間発表会

平成 25 年度の PDCA 表の Plan を中心に事務局各部署に発表していただき、学園の状況について情報共有をはかった。

### ■ 発表プログラム

1. 事務局長 13:30～13:41
2. 教務部 13:41～13:52
3. 学生生活部 13:52～14:03
4. 就職部 14:03～14:14
5. 総務部 14:14～14:25
6. 管財部 14:25～14:36
7. 休憩 14:36～14:50
8. 経理部 14:50～15:01
9. 入学事務部 15:01～15:12
10. 広報室 15:12～15:23
11. 家庭寮 15:23～15:34
12. 図書館 15:34～15:45



### 司会者まとめ

事務局間の連携推進上、また、職員は人事異動があるので他部署の業務を知っておくことは必要である。発表会は 9 月中旬であったので計画は実行中の時期であり、部署において計画の進捗状況は差が生じていた。計画は実行されて意味をもつ。各部署の責任者からその部署の計画の意図を知り、さらに実行状況を知ることで、他部署への理解が進む契機となった。また、自分の部署の状況を再確認する契機ともなった研修会であった（加瀬 洋・学園教育充実研究会）。

### 3. 各種講演会・ワークショップ

#### 3-1 情報セキュリティ講習会—「情報に対する危機管理」

本学では、昨年度、学園貸与パソコンのリニューアル、グループウェア導入といった情報システム環境の大幅な刷新を行った。それに伴い、教育、業務における情報機器の利用場面が急速に増加している。一方で、情報機器は利用方法を誤れば、利用者本人のみならず、学生や関係者にも多大な損害を与える事態を招くことがある。そこで、学園教育充実研究会では、IT 管理・運営委員会との共同企画で、「情報セキュリティ」の基礎知識を習得するための研修会を実施した。

##### ■ 実施日程

1. 9月4日（水）10:30～12:00（芸術館大教室）
2. 9月5日（木）12:50～14:20（芸術館大教室）
3. 10月24日（木）14:00～15:30（高校No.1 情報処理室）※主として高校教職員向け

##### ■ 講師

株式会社エフコム インストラクター

##### ■ 講習内容

1. インターネット犯罪の実情と対策
2. スマートフォンに伴うトラブルやアプリに潜んでいる脅威
3. SNS（Facebook、LINE 等）に関するメリット、デメリット



#### 司会まとめ

情報機器の活用に当たっては、情報量の膨大さもさることながら、教職員による不明なサイトへの安易なアクセス、SNS を介した無防備な情報発信などが懸念されたことから、外部講師による情報セキュリティ講習会を実施した。初心者の方の教職員については各種 SNS の機能およびメリット、デメリットについて理解を深めることができた。また、すでに情報機器を習熟している教職員については情報セキュリティに関する基礎知識を再確認するとともに意識の向上につながる研修であった（鍛野信子・学園教育充実研究会）。

### 3-2 ビジネスマナー研修会

事務局職員においても、学生・生徒・園児及び保護者の方々、地域の関係者（自治体・企業・住民など）への対応の重要性が増してきている。本研修会では、体系的なビジネスマナーについて、若手職員へ啓蒙するとともに、中堅以上の職員への再確認を目的に行った。

#### ■ 日程

平成25年12月13日（金） 3時限目（12時50分～14時20分）

#### ■ 会場

83年館 821講義室

#### ■ 講師

有限会社 ヴォイス・プロ代表取締役 吉田いくよ先生



#### 司会者まとめ

ビジネスマナーについて身につけていなければならない事柄は数多くあるが、本学においてビジネスマナーは自己の研鑽に頼っていたところがあった。専門家から体系的なビジネスマナーを学ぶ必要性が認識されていた。今回は限られた時間であったが、挨拶・話し方・接し方等について実際の状況を想定した研修を外部講師に依頼し実施した。若手職員にはビジネスマナーを学ぶ機会となり、中堅以上の職員には、マナー再確認の機会となった研修であった（加瀬洋・学園教育充実研究会）。

### 3-3 障がい学生支援 研修会－発達障がいを中心として－

障がいをもつ学生に関しては、平成 23 年 8 月に「障害者基本法」が改正され、文部科学省の「障害のある学生の修学支援に関する検討会」が平成 24 年 12 月に「検討報告（第一次）」を取りまとめるなど、各大学には今まで以上に修学支援体制が求められている。

本学でも障がいのある学生の修学支援の充実に取り組んでいくために、「障がい学生支援準備委員会」が今年度 8 月に立ち上がった。この取り組みを全学的に広げるために、学園教育充実研究会・障がい学生支援準備委員会共同開催による研修会を催した。

- 日時：平成 26 年 2 月 20 日（木） III 時限目 12：50-14：20
- 会場：創学館 2 階 521 教室
- 対象：大学・短大教員 および 事務局職員
- 講師：畠山祥正教授・村田 清教授（短大 幼児教育学科／障がい学生支援準備委員会）
- 内容：① はじめに 障がい学生支援にあたって大学に求められること（畠山祥正教授）  
② 発達障がいの理解と支援の実際（村田 清教授）



#### 司会者まとめ

本研修会では、現場対応に苦慮している教職員の存在や情報共有の難しさなどが浮かび上がり、すべての学生が公平に教育を受けられるような支援の重要性・必要性を教員・職員全体で確認することができた。

障がい学生支援はプライバシーの問題もあり個別対応が必然だが、教職員のみならず周囲の学生たちにも理解を促し協力してもらう体制も排除できないと思われる。また、在学期間中に各事務局窓口で対応にあたる職員が該当学生を個別に認知することは極めて難しい現状だが、突然の変更や訂正など事務的手続きに対応できない学生への支援方法は確立していかなくてはならない。さらに、障がいのある学生が免許・資格取得を望む際には、学外実習・研修などに伴う受入先の社会的な理解も得ながら進めなくてはならないと考える。

より組織的に支援していくための方法を探り、早急に実践に移していかなくてはならないとの認識を共有することができた研修会であった（松田理香・学園教育充実研究会）。

## 4. SD一外部研修参加記録

事務局職員においては、学内研修だけでなく、外部団体主催の研修に参加することが、職能開発において重要である。ここでは、本年度の各部署の外部団体主催の研修会への参加状況をまとめた。

### 4-1 教務部

番号	件名	主催者	場所
1	平成 25 年度 私立大学等経常費補助金説明会 (入門者向け)	日本私学・振興共済事業団	仙台ガーデンパレス (仙台市)
2	平成 25 年度 大学入学選抜・教務関係事項連絡協議会	文部科学省	メルパルク東京 (東京都)
3	平成 25 年度 大学職員情報化研究講習会～基礎講習コース～	公益社団法人私立大学情報教育協会 大学職員情報化研究講習会運営委員会	浜名湖ロイヤルホテル (静岡県浜松市)
4	科学研究費助成事業実務担当者向け説明会	日本学術振興会	東北大学 川内北キャンパス (仙台市)
5	大学入試センター試験連絡協議会 (第 1 回)	独立行政法人大学入試センター	昭和女子大学 (東京都)
6	第 63 回 東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会	東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会	福島大学 (福島市)
7	平成 26 年度科学研究費助成事業公募要領等説明会	日本学術振興会	山形大学 小白川キャンパス (山形県)
8	平成 25 年度「私立短大教務担当者研修会」	日本私立短期大学協会	大阪ガーデンパレス (大阪府大阪市)
9	平成 26 年度 大学入学者選抜大学入試センター試験 試験場設置大学連絡協議会	独立行政法人大学入試センター	北海道大学 学術交流会館 (札幌市)
10	大学入試センター試験福島県内連絡会議	福島大学	福島大学 事務局棟 (福島市)

11	大学入試センター試験連絡協議会（第2回）	独立行政法人大学入試センター	メルパルク東京（東京都）
12	「認定専攻科修了見込み者に対する新たな審査方式」の適用認定申出の手続き等に係る説明会	独立行政法人大学評価・学位授与機構	学術総合センター 一橋記念講堂（東京都）
13	大学設置等に関する事務担当者説明会の開催について	文部科学省	メルパルク東京（東京都）
14	「認定専攻科修了見込み者に対する新たな審査方式」の適用認定申出の手続き等に係る説明会	独立行政法人大学評価・学位授与機構	国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都）

#### 4-2 学生生活部

番号	件名	主催者	場所
1	第22回東北地区学生指導担当部・課長（相当職）研究会	東北地区学生指導研究会	会津若松ワシントンホテル（会津若松市）
2	平成25年度（通算第59回）学生生活指導主務者研修会	私学研修福祉会	大阪ガーデンパレス（大阪市）
3	平成25年度日本学生支援機構奨学金学校事務初任者研修会	独立行政法人 日本学生支援機構	東京国際交流館プラザ平成（東京都江東区）
4	平成25年度学生教育研究災害傷害保険説明会	公益財団法人日本国際教育支援協会	仙台東京海上日動ビル（仙台市）
5	平成25年度日本学生支援機構奨学業務連絡協議会	独立行政法人 日本学生支援機構	パレスへいあん（仙台市）

#### 4-3 就職部

番号	件名	主催者	場所
1	平成25年度第1回企業と大学による人材情報交換会	栃木県産業労働観光部労働政策課	ホテル東日本宇都宮
2	平成25年度東北地区私立大学就職問題協議会	東北地区私立大学就職問題協議会	ホテル青森
3	平成25年度東北地区私立大学就職セミナー	東北地区私立大学就職問題協議会	仙台サンプラザ
4	平成25年度東北地区私立短期大学就職指導研究会	東北地区私立短期大学就職指導研究会	上山温泉 古窯

5	2014 年度卒採用戦線中間報告総括セミナー	株式会社マイナビ東北支社	AER(仙台市情報産業プラザ)
6	就職指導・キャリア支援担当者セミナー	株式会社デイス東北支社	TKP ガーデンシティ仙台
7	大学におけるキャリア教育実践講習	エル・ソーラ仙台	キャリアコンサルティング協議会
8	企業と大学との就職セミナー	全国私立大学就職指導研究会	仙台国際ホテル
9	平成 25 年度 事務研修会	日本私立大学協会東北支部	ホテルクラウンパレス秋北 (秋田県大館市)
10	平成 25 年度就職部課長相当者研修会	私学研修福祉会	神戸ポートピアホテル

#### 4-4 大学図書館

番号	件名	主催者	場所
1	NII オープンハウス 2013	国立情報学研究所	学術総合センター (東京都千代田区)
2	平成 25 年度大学図書館シンポジウム	国公私立大学図書館協力委員会	パシフィコ横浜
3	私立大学図書館協会東地区部会平成 25 年度研修会	私立大学図書館協会東地区部会	桜美林大学
4	平成 25 年度東北大学附属図書館職員総合研修会	東北大学附属図書館	東北大学
5	第 20 回福島県内大学図書館連絡協議会実務者研修会	福島県内大学図書館連絡協議会	奥羽大学

#### 4-5 保健室

番号	件名	主催者	場所
1	勇気づけトレーナー養成講座	ヒューマンギルド	ヒューマンギルド研修室 (東京都新宿区)
2	アドラーカウンセラー養成講座	ヒューマンギルド	ヒューマンギルド研修室 (東京都新宿区)

#### 4-6 家庭寮

該当無し



#### 4-7 入学事務部

番号	件名	主催者	場所
1	私大職員のための大学におけるマーケティングと広報・募集の実践講座	私大職員研修センター	アルカディア市ヶ谷(私学会館)

#### 4-8 広報室

該当無し

#### 4-9 総務部

番号	件名	主催者	場所
1	平成 25 年度 私立大学等経常費補助金説明会 (補助金事務責任者向け)	日本私学・振興共済事業団	仙台ガーデンパレス (仙台市)
2	平成 25 年度 改正労働契約法に関する協議会	日本私立大学協会	アルカディア市ヶ谷 (東京都千代田区)
3	平成 25 年度 科学研究費助成事業説明会 (実務担当者向け)	日本学術振興会	東北大学 (川内北キャンパス)
4	平成 25 年度 第 1 回私学共済事務担当者研修会	日本私学・振興共済事業団	東京ガーデンパレス (東京都文京区)
5	平成 25 年度 事務研修会	日本私立大学協会 東北支部	ホテルクラウンパレス秋北 (秋田県大館市)
6	私学経営研究会セミナー	私学経営研究会	大阪ガーデンパレス (大阪府大阪市)
7	平成 25 年度 学校法人の運営等に関する協議会	文部科学省	品川きゅりあん (東京都品川区大井町)

#### 4-10 管財部

番号	件名	主催者	場所
1	平成 25 年度 私立大学等経常費補助金説明会 (補助金事務責任者向け)	日本私学・振興共済事業団	仙台ガーデンパレス (仙台市)
2	科学研究費助成事業実務担当者向け説明会	独立行政法人日本学術振興会	東北大学川内キャンパス (仙台市)
3	エコ活動に社員を巻き込むワークショップ	東京商工会議所	東京商工会議所ビル (東京都)
4	私立学校施設の耐震化等に関する説明会	文部科学省 高等教育局 私学部 私学助成課	文部科学省講堂 (東京都)

#### 4-11 経理部

番号	件名	主催者	場所
1	平成 25 年度私立大学等経常費補助金説明会	日本私立学校振興・共済事業団	仙台ガーデンパレス（仙台市）
2	平成 25 年度科研費助成事業実務担当者向け説明会	日本学術振興会	東北大学（仙台市）
3	平成 26 年度大学入試センター試験入試担当者連絡協議会	大学入試センター	秋田ビューホテル（秋田市）
4	平成 25 年度日本私立大学協会東北支部事務研修会	日本私立大学協会東北支部	ホテルクラウンパレス秋北（大館市）
5	平成 25 年度日本私立大学協会経理部課長相当者研修会	日本私立大学協会	オークラアクトシティホテル浜松（浜松市）
6	平成 25 年度私立短大経理事務等研修会	私学研修福祉会	ホテルオークラ新潟（新潟市）
7	学校法人会計基準の改正に関する説明会	文部科学省高等教育局私学部	仙台ガーデンパレス（仙台市）

## 5. 調査・研究

### 5-1 授業評価アンケート

授業評価アンケートは、本学では平成 18 年から一部導入、平成 22 年から全授業で導入している。平成 25 年からは、所属教員の結果は各学科主任に配布され、学科主任は、授業の改善に向けて学科教員に指導・助言を行っている。

表 5-1 講義系科目（汎用版）の授業評価アンケートの質問項目

番号	項目
1	授業の内容は理解しやすかったですか
2	授業は興味もてるような内容でしたか
3	授業はシラバスにそって行われていましたか
4	シラバスの内容は授業を理解するために役に立ちましたか
5	授業の展開や内容は、わかりやすくするためによく準備されていたと思いますか
6	講義の声はよく聞き取れましたか
7	授業は理解のできる速度で進められましたか
8	1 時限における授業の量・質は満足できるものでしたか
9	板書（スライド・OHP、映像資料等）は見やすく、分かりやすいものでしたか
10	授業内容に関する質問等について、適切な対応がなされましたか
11	この授業に対する教員の熱意は感じましたか
12	教室環境（清潔、明るさ、広さ等）はこの授業を受けるにあたって適切なものでしたか
13	この授業に対して、自ら意欲的に（予習・復習・自主学习など）取り組むことはできましたか
14	この授業に対して、遅刻・早退をせずに取り組みましたか
15	この授業に対して、無駄な話やおしゃべりをせずに取り組みましたか
16	【教員設定項目】この設問は担当教員からの指示に従って回答してください
17	この授業を総合的に判断すると、どんな評価になりますか

表 5-2 実習・実験・実技系科目の授業評価アンケートの質問項目

番号	項目
1	授業の内容は理解しやすかったですか
2	授業は興味もてるような内容でしたか
3	授業はシラバスにそって行われていましたか
4	テキスト・資料が、実験・実習・実技を行う上で役に立ちましたか
5	実験・実習・実技を行うに当たっての説明は、理解しやすかったですか
6	教員の声はよく聞き取れましたか
7	授業は理解のできる速度で進められましたか
8	この授業によって、知識・技能が身につきましたか

9	授業内容に関する質問等について、適切な対応がなされましたか
10	この授業に対する教員の熱意は感じましたか
11	安全についての教員の指導と配慮は十分でしたか
12	教室環境（清潔、明るさ、広さ等）はこの授業を受けるにあたって適切なものでしたか
13	この授業に対して、自ら意欲的に（予習・復習・自主学習など）取り組むことはできましたか
14	この授業に対して、遅刻・早退をせずに取り組みましたか
15	この授業に対して、無駄な話やおしゃべりをせずに取り組みましたか
16	【教員設定項目】この設問は担当教員からの指示に従って回答してください
17	この授業を総合的に判断すると、どんな評価になりますか

## 5-2 学生の授業・学習状況に関する実態調査

社会が抱える問題の多様化に直面し、今日、我が国の大学教育は様々な観点から変革が求められている。2012年、中央教育審議会は答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」を取りまとめた。この答申は「質的転換答申」とも呼ばれ、大学教育の内容の大幅な変革を迫る内容となっている。

その内容の骨子は、第一に「受動的学修から能動的な学修への転換」である。答申では「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」（p.9）と述べられている。第二に、「学生の学修時間の増加」である。本来、単位制度とは相応の学生の授業外での学修を前提とした制度であるが、それに見合った学習時間を確保している学生は少数である。

本調査は、本学でも、従来の授業の在り方が、学生の能動性を引き出すものになっていたか、また本学の学習環境、指導の在り方が学生の主体的学習を促すものになっていたかを検証するために実施された。ここでは、その結果の概要を報告する。

### 調査時期

2013年9月17日の後期オリエンテーション時に実施した。

### 調査対象

大学・短大の全学生を対象とした（表 5-2）。なお、後期オリエンテーションに欠席した学生、休学中の学生を除く。

### 調査票

全国大学生調査（東京大学 大学経営・政策研究センター、2008）の調査票における授業・学習に関する質問項目に、本学独自の項目を追加して調査票を作成した。調査項目は（1）授業に関する設問が2問（下位設問の合計9問）、（2）学習・生活に関する設問が1問（下位設問は9問）、（3）授業・学習に関する自由記述1問で構成されていた。

表 5-3 調査対象者の人数

大学・短大の別	学科	1年	2年	3年	4年	合計
大学	人間生活学科	13	7	9	12	41
	食物栄養学科	54	39	70	78	241
短大	福祉情報	14	13	/	/	27
	食物栄養専攻	47	46	/	/	93
	幼児教育学科	120	117	/	/	237
	生活芸術科	9	12	/	/	21
	音楽科	7	8	/	/	15
	文化学科	21	20	/	/	41
合計		285	262	79	90	716

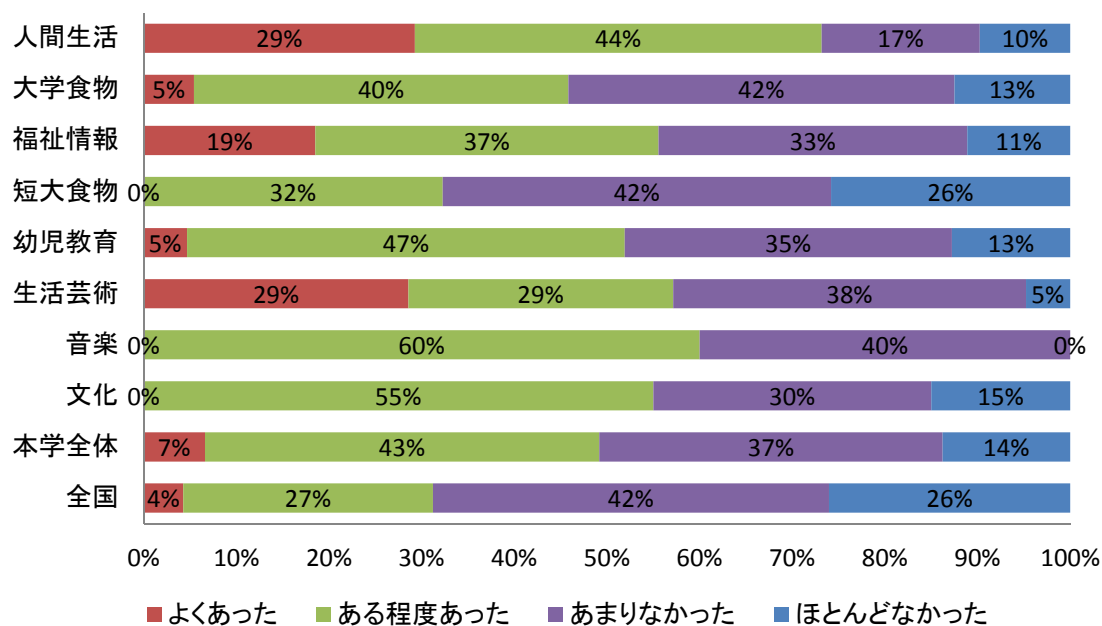
## 結果（概要）

ここでは、「能動的学習（アクティブ・ラーニング）」に関わる設問3問、「授業外学修」に関する設問2問の結果のみを報告する。

### 授業中に自分の意見や考えを述べる

本学全体において「よくあった」「ある程度あった」を合わせると50%であり、これは全国の31%と比べてかなり高い。なお、この項目は学習内容の性質を反映してか、学科間のばらつきが大きい。

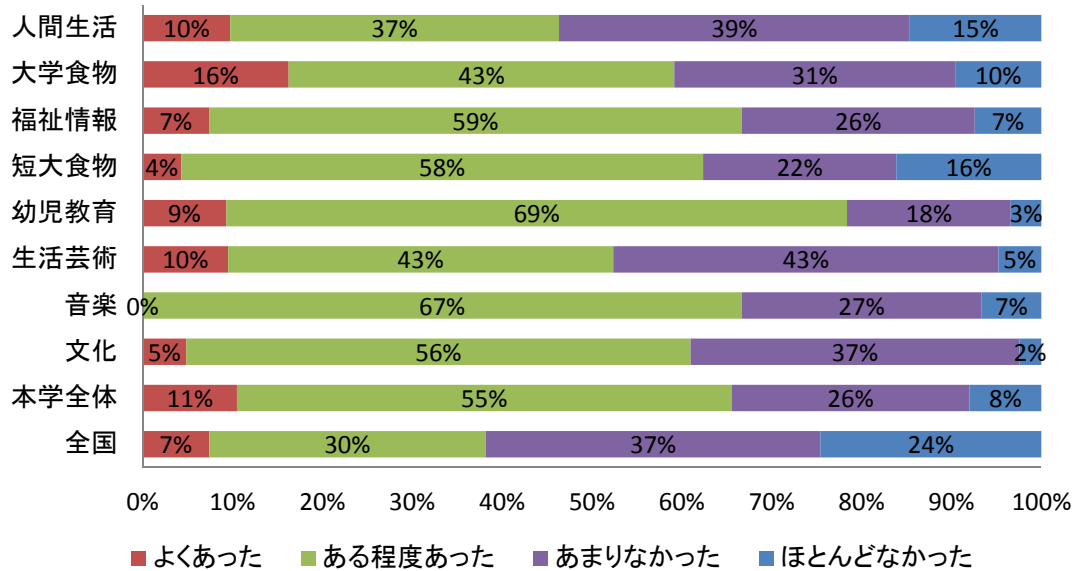
#### 授業中に自分の意見や考えを述べる（経験したか）



### グループワークなど、学生が参加する機会がある

本学全体において「よくあった」「ある程度あった」を合わせると 66%であり、これは全国の 37%と比べてかなり高い。なお、この項目も学科間のばらつきが大きい。

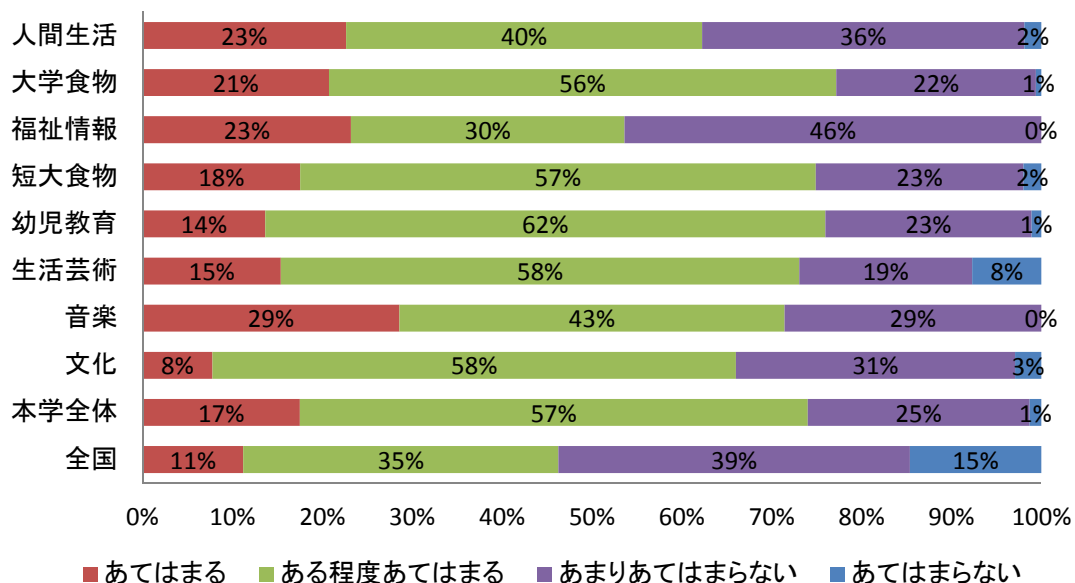
#### グループワークなど、学生が参加する機会がある(経験したか)



### グループワークやディスカッションに積極的に参加している

本学全体において「あてはまる」「ある程度あてはまる」とした者を合わせると 74%であり、これは全国の 46%と比べて高いといえる。ただし、低い学科では 50~60%台であり、学科間のばらつきが大きい項目である。

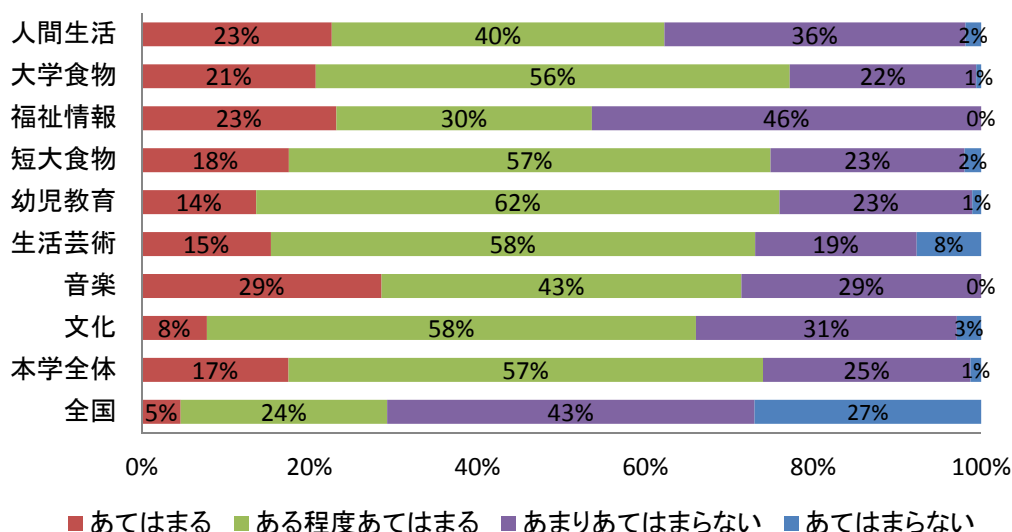
#### グループワークやディスカッションに積極的に参加している



## 必要な予習や復習はした上で授業にのぞんでいる

本学全体において「あてはまる」「ある程度あてはまる」とした者を合わせると74%であり、これは全国の29%と比べて非常に高い。本学の学生は他大学に比べて非常に「真面目」であるといえるだろう。

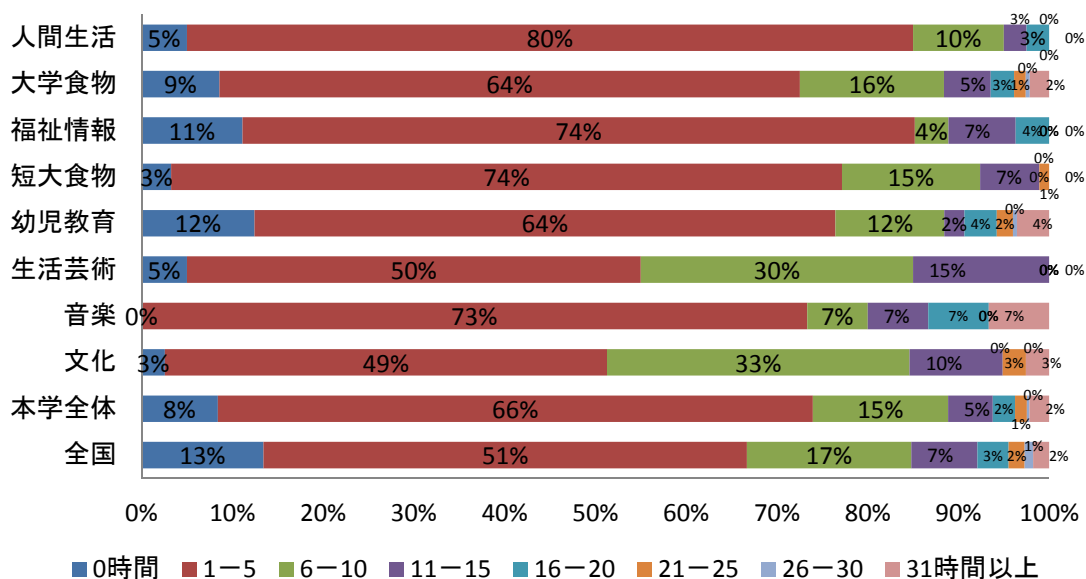
### 必要な予習や復習はした上で授業にのぞんでいる



## 1週間における授業の課題、準備・復習の時間（学期中）

この設問に0時間と答えた学生は本学では8%であり、全国の13%より低い。本学では1-5時間が66%と極めて多く、全国の51%よりかなり多い。一方で、6時間以上の者は全国を大幅に下回る数値である。本学の学生は総じて、短時間は学習しているものの、一定以上の学習量を超える者は少ないということである。

### 授業の課題、準備・復習



## 引用文献

中央教育審議会（2012）. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）

東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策研究センター（2008）. 全国大学生調査 第1次報告書



平成 25 年度 学園教育充実研究会（大学・短大部門）

FD 部門	垣花 真一郎（委員長）	家政学部 人間生活学科
	京免 徹雄（副委員長）	短期大学部 幼児教育学科
	鍬野 信子	家政学部 食物栄養学科
	松田 理香	短期大学部 生活芸術科
	郡司 尚子	家政学部 食物栄養学科
	折笠 国康	短期大学部 幼児教育学科
SD 部門	加瀬 洋	総務部
	高橋 一	経理部
	菅野 英樹	入学事務部
	鈴木 美由紀	学生生活部
事務担当	鈴木 光洋	教務部
	安藤 岐恵	教務部